



留学生新聞

2009年11月20日 発行 〒512-8512 四日市市萱生町1200 留学生支援センター

編集部：王 金榮（経営3） 鄭 秋蘭（経営3） 吳 徳峰（現代ビジネス3）
チェトリ・ミラン（メディア2） ヤン レイ（経営2） ユディ・ヌガラハ（総合2）



よんよん祭大成功！！

平成21年度の大学祭「よんよん祭」が10/24（土）、10/25（日）の二日間に渡り行われました。「よんよん祭」は、四日市大学と四日市看護医療大学が共同で行った大学祭です。「はじめの一步」というテーマの下、さまざまな企画が展開され、多くの人で盛り上がりました。

メインステージでは、男装女装コンテストやベストスチューデントコンテストなど、ユニークなイベントもありました。また、両大学の模擬店は中庭に集結し、それぞれに呼び込みをする声で賑わっていました。中でも留学生のお店は大人気で、餃子やベトナムスープは完売してしまう勢いでした。

今年の学祭は初めての試みが多くありましたが、当日は大成功だったと思います。この大学祭をきっかけに、両大学の学生の交流がさらに深まっていけばうれしいです。

四日市看護医療大学2年 日比野 佳奈

今年の水餃子！！

“店長、これは水に漬けますか？”

振り返ってみると、中学生みたいに可愛い女の子がクコを手に、鐘さんに聞いていた。男二人が大きな鍋に餃子のスープを煮込んでいる。隣に留学生会会長が餃子ダレを作っている。“レジ”のスタッフが食券を整理したり釣銭を用意したり、真剣な顔。後方に胡瓜とニンジンに刻む手際も熟練していた。皆があたかもいつものアルバイト先にいるように大忙し。

11時。客足が増え、“商売”が始まった。“いらっしゃいませ”“おいしい水餃子いかがですか？”と誰もが愛想よく声をかけている。“水餃子、いくらですか？”とお客が訪ねると皆声を揃えて答え、にぎやかな雰囲気に囲まれていた。キッチンでは沸騰したお湯に餃子を入れ、出来上がるとスープをかけ、刻んだ胡瓜、ニンジンとクコ、葱などをつけて完成！

仕事はほとんどやらなかったが、見ているうちにお腹が空いたので、水餃子を注文した。客席につくと、一人のお客が、“中国の水餃子、おいしいよ！”と私にお勧め！スタッフのつもりなのに見物人と間違えられるなんて切ない。けれど、“中国の水餃子、おいしいよ！”と勧められただけで、嬉しかった。

私のデタラメはほっておいて、一番大事なのは：中国の水餃子は大好評でした！

そして早々と完売しました！Yeah!

皆さん、お疲れ様でした！



（総合政策学科2年 満 都拉）



奨学金

平成 21 年度私費外国人留学生奨学金のお知らせ

留学生を対象とした奨学金が給付されました。今年は、世界的な経済不況と留学生の増加に対応するべく、文部科学省から支給される私費外国人留学生学習奨励費の受給者大幅増加に加え、アパート賃貸や不動産事業で有名な㈱レオパレス 21 が新設した「レオパレス 21 留学生奨学金」を受賞するなど、新たな動きがありました。

受賞者の皆さん、おめでとうございます。

***私費外国人留学生学習奨励費〔文部科学省〕**

平成 21 年度受給者(1 年間)60 名／平成 21 年度後期受給者(6 ヶ月間)16 名

***レオパレス 21 留学生奨学金〔㈱レオパレス 21〕**

林 燕(総合政策学科 1 年 リン エン)

***三重県私費外国人留学生奨学金〔三重県〕平成 21 年度合格者**

満 都拉(総合政策学科 2 年 マン ドラ)

李 婧雅(総合政策学科 3 年 リ セイガ)

劉 春華(社会環境デザイン学科 3 年 リュウ ハルカ)・

エスコートマリッサ クナナン(経営学科 3 年)

***国際ソロプチミスト三重ー北奨学金〔国際ソロプチミスト三重ー北〕**

カイン・サベ(経営学科 1 年)



第 5 回留学生による日本再発見の旅「宗村南男留学生奨学金」

留学生の奨学金である「Discover Japan 日本再発見の旅」の受賞した研修旅行を実施しました。研修旅行を実施したのは王 金栄(オウ キンエ)さん(経営学科 3 年)をはじめ 4 名です。

今回は、ネパール・中国・韓国の 3 ヶ国出身の学生がチームを組み、本奨学金初めての多国籍チームでした。4 人は 8 月 24 日に名古屋を夜行バスで出発、翌日 25 日鹿児島に到着して、桜島などを見学しました。その後は、佐賀県の日本語学校の生徒さんと懇談や広島の実験資料館の見学、日本三景のひとつである宮島の観光などを楽しみました。

「実験資料館で、実験の被害にあった実物が置いてあり、戦争は残酷だと痛感した」「疲れたけど、楽しかった」など、それぞれに思いを抱いた研修だったようです。

今年はいく組の留学生が、研修旅行を実施しました。関 暁丹(エン ギョウタン)さんと李 暁麗(リ ギョウレイ)さん(共に総合政策学科 1 年)です。

2 人は日本の古い町並みを残す木曾路を訪れ、遠い時代の旅人たちに思いを馳せました。島崎藤村や正岡子規など、木曾路に縁(ゆかり)のある作家や歌人のことも勉強し、この句碑なども実際に見ることで、身近に感じる事ができたようです。

関 暁丹(エン ギョウタン)さんの「旅行記」は次のページに掲載しています。



第 5 回 Discover Japan 奨励賞 「木曽路めぐり」

総合政策学科 1 年 閻 暁丹



第 5 回「Discover Japan 日本再発見の旅」のおかげで、夏休みのはじめに友達と一緒に木曽でのすてきな旅行をいただきました。もう一カ月前のことですが、木曽の美しい風景がずっと私の頭の中に浮かんできます。では、私の文字を通じて、木曽の風情をお届けしたいと思います。

日本のふるさとといえば、ロマン薫る中山道宿場町・木曽です。遠い時代、多くの旅人たちを癒し賑わった、独特の魅力があります。本来宿場町は、公用旅行者・御用荷物を優先させるための制度でしたが、街道が整備されることにより、庶民の旅行も楽になりました。物資の流通、通信の発達、さらに文化の伝播にとっても大きな役割を果たすこととなりました。

木曽路を歩く、宿場町に立って石畳、千本格子、苔むす石仏、溪流や大樹、宿場の名残をみつけながらタイムマシンに乗るように遠い日の昔に帰ります。かつての木曽路は山中の難路でした。昔の旅人は、木曽路にさしかかる時にどんな思いを抱いたのでしょうか。明治の文豪藤村の大作「夜明け前」の中で、「木曽路はすべて山の中」という一節もありました。藤村の故郷、馬籠へ行って、馬籠峠の東側の深い樹木に囲まれた坂道を歩き、「山の中」の木曽路を味わうこともできました。

坂道を上がりきると峠の茶屋があります。側には馬籠峠の道標とともに正岡子規の句が刻まれ、自然石の石板が連なっています。逆に峠から東へ道を下れば、その先に中山道の江戸時代の風情を感じることもできる立場茶屋がありました。宿場のあちこちに五平餅を焼く香ばしい香りが漂ってきて、蕎麦を打っているそば処もどこでも見られました。

中山道 69 宿のうち日本橋より 42 番目の宿場は妻籠です。枳形の街並みは古い建物が残され、交通の要衝として古くから栄えていました。常夜燈や水場も宿場の面影を偲ばせています。夕闇が来ると、灯りをつけて旅人たちを優しく迎えます。濃くなる宿場の雰囲気は言葉にできません。

昔の「奈良井千軒」と言われ賑わっていた宿場町は、今も 1km にわたって伝統的家屋が建ち並ぶ宿場町風情が昔のままの姿に残されています。出梁造、千本格子、猿頭、旅籠の軒灯など、奈良井宿独特の造りを見せる伝統的家屋が続きます。高級な漆器店もたくさん揃っています。ゆっくり歩いてみれば、ある一瞬、ここに住めば今後は十分だという考えも浮かぶかもしれません。

山の国、水の国、森の国、美しい自然の中で、自分だけの季節を見つけませんか。野辺に揺れる色とりどりの草花に、風も光も爽やかな木曽はどこまでも陽気で、逞しいエネルギーに満ちています。そこに忘れかけていた感動が待っています。小さな旅だからこそ、人生という長い旅の出会いの温もりがあります。



イベント

<第15号>

思い出の写真展

長年に渡り、暁高校国際交流部と四日市大学留学生とは、様々な交流を続けてきました。留学生が暁高校を訪れて、母国の文化や料理を紹介したり、暁高校の生徒のみなさんが本学を訪れて親睦を深めたり様々な形で継続的に交流を深めています。そんな活動を写真でふりかえる写真展が大学祭期間中に、暁高校国際交流部によって開かれました。



文化交流会でのお茶会や、クリスマスパーティーなど今までの交流会の写真や、協力して活動した「雲南省に小学校を建てようプロジェクト」の写真が展示されており在校生の写真から卒業生の写真まで懐かしい一枚一枚の写真からは、楽しかった時間を思い出させてくれました。

展示を見ていた留学生からは「あ～、〇〇先輩だ!」、「私、若い!」、「また、交流会できたらいいね。」などの様々な声が聞えてきました。

(留学生支援センター 黒田 郭格)

留学生日本語弁論大会



2009年10月24日と25日に行った大学祭に、たくさんの経験を得ることができました。私がこの大学で勉強を始めてから、そろそろ2年経ちます。去年と今年で、2回大学祭に参加しました。

自分が代表としてイベントをあまりしたことがなかったが、頑張って今年の大学祭には、留学生による弁論大会に司会として参加することになりました。初めてなので、もち

ろん緊張していました。あまり練習してなかったのが、間違いがところどころありました。

私はメディア関係の学生として、本当に小さいイベントでもとても、細かい部分まで考えなければならないと感じました。弁論大会というのは、自分が持っている考え方や知識や感動を、自分以外のさまざまな考え方を持っている人に伝えることです。しかも、自分の母語ではなくて他の言語で、大勢の人前で話すことや自分を表現するということは、簡単に誰でもできるわけではありません。その中で、参加者はそれぞれ自分の事を話しました。素晴らしいスピーチを聞くことができました。それはすべて、いい経験になったと思いました。同じように人の前に、出る経験を身につけました。

経験を持つというのも、一つ大きい知識を得ることであり、また自分自身を表現できることなので、ぜひ皆さんも色々なチャレンジをしてみましょう。

(メディアコミュニケーション学科2年
チェトリ・ミラン)

第6回 留学生日本語弁論大会 会場審査員賞

テーマ 「私はアホです！」

メディアコミュニケーション学科3年 ホック エムディ モビヌル

皆さん、誰かにアホって言われたことはありますか？私は子供のころ、何かへまをするたびに母に「お前は这个世界で2番目のアホだね」とよく言われました。2番目のアホ？「じゃあ、一番目のアホは誰？」と聞くと、「お前のお父さんだよ」というのが母のいつもの答えでした。

母から「世界で2番目のアホ」といわれた私ですが、その後は日本に来て、慣れない環境でいっしょうけんめい、アルバイトをしながら勉強しています。

アルバイトでは、毎日数百人の日本人のお客さんと接する機会があり、その中で自分の人間性や社会性を磨こうと努力しています。

さて、私のアルバイト先のコンビニに、よく高校生の娘さんと一緒に来るお客さんがいました。ある日の夜中、その娘さんが一人でコピーをしていたのですが、彼女はコピー機の上に、本を忘れていってしまったのです。私は、彼女とお父さんの顔を知っていましたが、名前も住所もわからないので、届けることはできませんでした。その本はお店の方で預かることになったのですが、忘れ物はずっとそのままでした。

一ヶ月を過ぎると、お店では忘れ物を処分してしまいます。しかし私は誰の忘れ物かわかっていたので、自分のバイクのシートの下に預かっておくことにしました。そして二ヶ月を過ぎたころ、彼女のお父さんがようやくお店に来てくれたのです。私がお父さんに事情を説明して忘れ物を返したら、とっても喜んでくれました。そして、私のこと、それと私の日本語のことを、私が恥ずかしくなるぐらい、たくさんたくさん誉めてくれました。とても楽しい会話で、仕事のことも忘れてしまいそうなほどでした。

やがてそのお客さんが、「どこで日本語を勉強してるんですか」と聞くので、私は「四日市大学の留学生です」と、当たり前のように答えました。しかしその答えは、お客さんにとっては当たり前ではなかったようなのです。それまでニコニコしていたお客さんの表情が、一瞬にして変わりました。そして「あそこはアホしか行かないとか聞くけど……」と言って、軽蔑するような目で私を見たのです。

私はとても大きな衝撃を受け、それから何週間も、そのことが頭から離れませんでした。その時は冷静に考えることができませんでしたが、後になってみると、私は2つのことにショックを受けていたように思います。

1つは、私が通う四日市大学、そしてその学生たちみんながアホ扱いされたことです。私の祖国・バングラデシュには、自分たちの言葉が使えない時代がありました。実はバングラデシュは、世界で母国語のために戦争した、たった一つの国なのです。そして母国語のためにデモをして、パキスタンの軍人に最初に殺されたのは、数人の学生たちでした。独立戦争の時も、学生たちは一般の国民と共に独立に大きな貢献をしました。国のいろいろな所に設置された戦没者記念像のほとんどが、学生の姿なのです。学生は常に国民の期待を担っており、現在でも大きな役割を果たしています。先進国に留学し、いろいろな技術を学び、国の発展を支え、国際化に貢献している学生もいます。学生は、バングラデシュでは国の宝なのです。そんなバングラデシュからやってきた私にとって、高等教育を受けている学生をアホ扱いするなどということは、まっ



たく信じられないことであり、大きなショックでした。

もう1つショックだったのは、私のことが大学の名前で判断されてしまったことです。さきほどのお客さんは、一体何を見ていたのでしょうか？私を見てくれていると思っていたのに、大学の名前が出たとたんに、私ではなく大学の名前に目を向けてしまったのではないのでしょうか。お客さんの目には、果たして私は映っていたのでしょうか。

みなさん、組織の名前でその人を判断するなどということが、果たしてできるのでしょうか？私にはできるとは思えません。同じ組織であっても、いろいろな人がいるのですから、組織で人を判断することなど、できるわけがないのです。ですから、大学の名前で私を判断することなどできないはずですし、私がどんな人間であるかは、私を見なければわからないはずです。

もちろん私は、四日市大学のおかげで今の自分があると思っています、大学にはとても感謝しています。しかし、四日市大学の留学生である前に、私は私だということも事実ではないでしょうか。

母から言われた通り、私はアホかもしれません。本当に、世界で2番目のアホなのかもしれません。アホならアホでもかまいませんから、どうか皆さん、私のことは私を見て判断して、他のことでは決して判断しないでほしいのです。

E ボートは楽しかったです！！

夏休み、ドキドキしてEボード会に参加した、日本語にあまり自信がない僕にとって、学校の活動を参加するには意欲が不足していた。しかし、勉強しながら、バイトをしていて、あまりに暇がなく、つまらない生活をしていた僕、ちょっと出かけてみようと思って、友達と一緒に申込んだ。

8月29日朝、皆は時間通り学校で集合した。バスに乗っていた時、最初はアジア各国から来た全く知らない人たちだったのに、冗談を言ったり、



遊んだりするほど仲よくなった。楽しい気分の中で目的地に到着した。着いた途端、大勢の人々に驚いた。こんなに多くの人があるとは思わなかった。以前、テレビでボランティア、いろいろな活動を見たことあるが、実際に行って参加してみようという機会はなかった。練習は、先生たちの指示に従って二つのグループに分かれた。うれしいが、なんとなく変な気持ちで参加した。そんなに難しいことではないが、皆は初心者なので、なかなかまっすぐいけなくて、ずっとグルグル回っていた。

他のチームの練習を見ながら練習したところ、僕らは弱くて比べることもできないと思った。しかし、負けるわけにはいけないという若者なりの活気と先生の指示に従って、真面目にやり始めた。当時の気持ちは言葉で言えないくらい複雑で、緊張・興奮などいろいろと重なっていた。気持ちは複雑だが、皆のために、皆で行動するという連帯感は僕にとって一番楽しいところである。結果は重要ではなかった、その過程が大切で、体験できたことが素晴らしいと思った。

日本語は下手でも大丈夫、まだ私たちは努力している、こんな単調な留学生活の中で学校活動が必要だと思う、活動に参加すれば、日本語の勉強もなり、もっと重要なのは寂しい気分を転換することができる。心を開ける、しかも新しい友達ができる。またその時、いつも厳格な先生たちも優しくなった。疲れたけれど価値がある。来年のEボートも期待している。



コラム

高校卒業と同時に憧れの日本への留学を決めて来日し、今年で 6 年目です。楽しいことも、大変な経験もありました。笑って泣いてそして本当の自分を見つけ、今後の人生にも自信を持つようになりました。

人生には多くの十字路口があり、違う行き先には違う人生が待っています。四日市大学進学の方法を選んだのは本当に良かったと思います。着物コンテスト世界大会出場、大学祭や弁論大会など、様々な経験はすべて宝物です。そして留学生会会長として、雲南省小学校建設や四川大地震の募金活動などを行いました。子供達の笑顔の写真、被災地から感謝の手紙などが届き、涙を溢れるほど嬉しい思い出でした。そこで人生の意味を考え、将来は国際開発機構で仕事する決意をしました。貧困地域に貢献するために大学院に進学し、より専門的な知識を身につけます。



人生のヒントを下さった先生達との出会い、未熟な自分に優しく接してくれた留学生支援センターの職員達、そして、いつも励まし合い共に頑張る友達との出会いがあったから、今の自分があります。感謝の気持ちで一杯です。
(経済学科 4 年 沙 鑫)



先生達の言葉や母校の皆を思い出し、自信を持って夢を叶えるまで頑張れる気がします。3 年生になった私は、これからいよいよ就職活動が始まります。就職活動は初めて経験することで、不安な気持ちを持っています。今は、大学の就職ガイダンスに参加し、自分がやりたい仕事を考えながら、就職に関する必要な情報を収集しているところです。

また、大学の推薦を受けてアジア人財資金構想というプログラムにも参加しています。このプログラムは、特に、今の不景気な時代では、私のように日本で就職したい留学生にとっては、大変良いチャンスだと思います。このチャンスを生かし、積極的に就職活動を進めていきたいと思っています。

人生に一度きりの新卒就職活動は私にとっては、とても大事なことです。悔いを残さないよう精一杯頑張りたいと思います。
(経済学科 3 年 林 亮)

2009 年 4 月に四日市大学に入学しました。入学する前は色々な不安がたくさんあったが、実際に入学してからは親切な先生方や先輩たちがいて、不安な気持ちは必要ないというのがわかりました。それに、留学生支援センターがあって、なんでもサポートしてくれて、とても感動しました。自分が大学に入ったばかりだと思っているうちに、もう前期の試験の時期がきました。そして、夏休みになりました。

夏休みが終わって、後期に入いて、前期の成績が配付される日はとても緊張しました。私を含めて 1 年生の全員にとって、この前期の試験ははじめての大学試験の結果ですから、私と同じくみんな緊張しているのかなと思っていました。前期の成績を見て、後期はもっと頑張らなくてはいけないとわかりました。

私は日本に来て、もうそろそろ 3 年が経ちます。日本に来て、自分がどれくらい成長したか、日本に来る前に持っていた目標をどれくらい実現できたか、自分で考えてみました。けれども、自分の目標をなかなか実現することができなくて、自分の将来のことが心配になりました。これからは自分で厳しく計画を立てて、自分には甘くするべきではないと思っています。



(経営学科 1 年 チェリー・トン)



国際交流



私は、2年生の時から英語クラブの部長をしています。クラブに入ろうと思ったきっかけは、留学生と接して異文化に触れてみたかったからです。そのため、クラブ以外でも留学生交流会などにも参加させて頂きました。

しかし、これらは気軽に参加するというものではありません。もっと身近に留学生と触れ合ってみたい。そんなときに活用するのが ESL です。

ESL は、ただ単に英語能力の向上のために活用する場ではありません。日本人はもちろん留学生と触れ合い異文化に接することが出来、多くの友達も出来ます。私はこの ESL に 2 年生の時から利用しています。私にとって ESL は異文化を感じる事が出来、留学生とコミュニケーションがとれるため、とても新鮮で楽しいです。

また、年に 1 回「英語スピーチコンテスト」が行われます。私も 2 回参加しました。参加するなかで、お互いが教えあったり、原稿を読みあったりして練習をするため普段以上にコミュニケーションが図れます。

興味がある人は一度 ESL に遊びに行ってみてくださいね。（総合政策学科 3 年 岩谷 貴章）



夏休みに中国語学研修



北京での観光の後、語学研修を行う天津の南開大学では留学生用の寮に二週間滞在しました。北京で色々なものを観て、好奇心は更に上がっていますから、テレビの CM ですら真剣です。「你吃不吃！一，二，…孩子不吃饭…」などと何回も何回も練習して、村井さんと二人で盛り上がっていました。肝心の中国語の授業はと

いうと、クラスメイトが名古屋や東京の大学の中国系学科の学生ばかりで、先生は中国語以外には「オハヨー！」しか話さないし、ついていけないか心配でした。案の定、始めは先生の言っていることの半分以上が聞き取れなくて、聞き取れてもその意味がわからなくて、せめてもっと単語を覚えておけばよかったと後悔しました。

そんなこんなで、生活自体が中国語に浸かっているのでも徐々に耳が慣れて行きました。授業は本気の集中力を何時間も維持していたので大変疲れましたが、使える中国語が増えていくのが大変面白く、いつの間にか最後の試験では四日市大学がトップの成績を取るようになっていました。天津の空気にも慣れて、友達もでき、一番楽しいときに帰国しなければならなくなり、何かを置いてきてしまったような心持ちで日本に帰ってきました。

「北京欢迎你」。そう自分が言われているように感じ、現在は来年もう一度中国へ飛び立とうと準備しています。

最後に、準備から何から何までお世話になりました加納先生に大変感謝いたします。

（環境情報学部 3 年 立木 宏征）